

広島県地方産業教育審議会（第4回） 議事録（協議概要）

1 開催日時

令和4年10月3日（月）

2 開催場所

I G石田学園ビル 131号室

3 出席委員

本多委員，植月委員，山本委員，川村委員，小池委員，長坂委員，田中委員，兼田委員，吉村委員（欠席：古澤委員）

4 事務局出席者

平川教育長，竹志学びの革新推進部長，沖本学校経営戦略推進課長，木村高校教育指導課長，緒方教育指導監，中村主査，小榘指導主事，宮本指導主事，本田指導主事，開地指導主事，後藤指導主事，和田主任，有馬主事，砂田主事

5 議題等

- (1) 開会
- (2) 報告
- (3) 協議
- (4) 閉会

6 協議概要

会長：

- 昨年8月にスタートした本審議会も，じっくり時間をかけて審議し，本年3月末の第3回審議会で中間報告をまとめ，6月に公表，県民の皆様からの意見募集という形で意見をいただいた。寄せられた意見を踏まえて専門委員会で協議いただいた結果を反映したものが答申（案）になる。本日は，この案について意見をいただき，形にしてまいりたい。
- それでは，協議に入りたい。まずパブリックコメントの意見への対応について協議を行う。資料3では，72件のコメントが要約という形で「意見の内容」の欄に書かれている。それに対する回答が「県の考え方・対応方針」の欄に書かれてあり，これは，当審議会の考え方という意味にもなるかと思うので，そういう目で見えていただき，御意見を伺いたい。

副会長：

- 全体的にざっと拝見し，思っていたより前向きな意見，建設的な意見をいただいたと感じる。中には，答申に盛り込んだ内容について更に具体的に踏み込んだ提案も出ていると思う。
- 「県の考え方・対応方針」の記載について，実際に答申の中に反映されていることは，ここに記載があるという書き方をしているが，統一性がどうかと思う点が少しあった。例えば，8ページの53番「専門高校の教職員を優先的に企業研修に参加させるべき」という意見に対して，答申には企業訪問や研修の実施についての記載が16ページにあるにもかかわらず，「参考にします」というだけの回答となっている。どういう考え方でこういう記載しているのか。何かニュアンスの違い，表現を変えている理由があるか確認させていただきたい。

会長：

- 事務局から説明いただけるか。

事務局：

- 「県の考え方・対応方針」の欄については、県民の皆様からの意見を丁寧に反映していきたいという思いでまとめている。

御指摘の箇所は、確かに答申にも記載があるところでもあり、見直しをしたい。

副会長：

- よろしく願います。

会長：

- では、少し表現を変えていくことにしたい。その他、いかがか。

委員：

- 過不足なく、よくまとめられていると思う。審議会での議論が反映された意見が出てきているということで、この審議会での議論が、産業教育に関心のある色々な方々、県民の発想に対してプラスになったかと思う。

委員：

- 一般の方が感じた意見と教育関係者からの意見の双方が文書からも見てとれる。県の考え方の記載についても、答申に記載があるのでそれを見ていただきたいというものもあれば、今後検討し、具体化していくプロセスにおいて参考としたいというものがあるので、「参考とさせていただきます」という表現を用いることは適切であると思う。

会長：

- パブリックコメントの結果に係るこの資料の公表時期は、最終的な答申を公表するときという理解でよいのか。

事務局：

- 公表時期は、答申と同じタイミングと考えている。

会長：

- 分かった。

それでは、先ほど御指摘のあった53番については、実際に答申に記載がある内容ということで、少し表現を変えることにしたいが、おおむねこの内容での公表としてよろしいか。

(異議なし)

会長：

- では、そのようにしたい。

続いて、今日のメインの議題である答申案の協議に進みたい。中間報告から幾つか見直しを加えたものが答申案として提出されている。この後、各章を区切り、意見をいただいてまいりたい。

- 第1章は、本県の産業教育を取り巻く現状という見出しでまとめているが、この部分について、改めて気になる部分等の意見をいただきたい。

委員：

- 第1章に関しては、今まで議論してきたことがまとめられており、良いかと思う。

数値も最新のものに更新されたことでより分かりやすく、行動の見通しが利くようになるかと思う。

委員：

- 専門委員会でもかなり議論して、現状のところは、第1回審議会から指摘されていたVUCA*について、中間報告ではタイトルにVUCA、更にスーパーVUCA、ウルトラVUCAを入れて書いてあったが、見出し自体は簡潔にしようという趣旨で割愛させていただいた。もっとも、これからは大人ですら先が見えない現状だということをしっかり示そうということで、本文中に詳しくVUCA、スーパーVUCA、ウルトラVUCAということを書き込んでもらっている。

会長：

- 大きな規模で捉えた中で、本県ではどうすればいいのかということを示すスタート地点という意味では、非常に良い形でまとまっていると私も感じている。

- では、第2章の目指す姿の協議に進みたい。

ここは当初、生徒と教職員の姿の二つだったが、生徒視点、教職員視点の他、学校の視点でもどうあるべきかをしっかりと示そうということで、この三つの分類としたところだが、いかがか。

委員：

○ この答申案はとても力作だ。しっかりまとめていただき、読みやすく分かりやすいと感心している。

○ これ以上盛り込んでほしいという話ではないが、この審議会を通じて置き去りになっていると感じたのは、教職員の姿のところ。例えば目次を見て、第2章の「(2) 教職員の資質・能力向上」とあるが、「もっとええ人、もっとええ人」、「もっと賢こうなれ」と言っているようだが、どこまで行くのかと感ずる。

10ページに「いつの時代も求められる教職員の資質・能力」というのが四角囲みで4つ示されており、これは当然必要なので否定はしないが、教育をよくするためには、先生たちが幸せで余裕があることが土台になっていないと達成できない。どんどん、これもこれもと増やして、首を絞めているのではと思うくらい本質的に何か逆行している。このパターンをちょっと変えないといけない。

今回の答申はこれでいいと思うが、良いことばかり言ってできませんでしたという画餅になってしまわないように、今後、広島県が教育改革を進めるための土台として教職員自体の環境整備をしないといけない。〔示されている4つの資質・能力に置き換えていうと〕「倫理観と豊かな人間性を保てる環境の整備」、「子供に対する教育的愛情と教育に対する使命感を保てる環境の整備」、「専門性を発揮し、的確に業務を遂行できる環境の整備」、「社会や子供の変化に柔軟に対応できる環境の整備」だ。

第2章「目指す姿」の後の第4章「目指す姿の実現に向けた産業教育に関する方策」の中に、新しい時代の教育改革、教育推進の土台は教職員である、一丁目一番地であることを示すための「教職員に対する環境整備」という項目が、来年度以降は欲しいと思う。

○ 今の教職員の状況は、このままやっていくことができないのではないかと。業務がどんどん増えて、更に企業にインターンに行けというのは大変だ。おそらく担当している校内の仕事を誰かに預けるなり、替わってもらったりするなんてできず、夜なべして、担当している仕事も済ましながら企業に研修に行って、レポートも書くというのでは、いつ自分の子供と対話して、いつ夫婦で対話して、いつ親の孝行をするのか。自分自身がリフレッシュするための旅行なんかも全くできず、そんな状態で良い教育ができるとは思えない。そこは今後是非、章立てするくらい真剣に、広島県としてはこう思っていると示すべきだ。

教職員の待遇改善と言うと、何か甘やかすみたいに聞こえかねないが、やはり環境を本当にできる環境にしないといけない。民間はもう環境改善を必死でやっている。グレート・プレス・ツー・ワークという、すばらしい職場環境をどうつくるかという検討を真剣にやっている。ちょっと刺激的なトピックとしては、2年後には新卒の初任給を年収で五百数十万円にする。東京でも低くない結構インパクトがある額だ。マイクロソフトの日本法人は、新入社員の初任給が年俸で七百数十万。こういう報酬の面も含め、働き方とか色々な面で本当に改善しないといけない。

○ 最近ちょっと下火になってきたジョブ型の議論もあったが、ジョブ型というのは、完全にテクノロジーの下請として、テクノロジーよりも安いから人間を使うというタイプのジョブ型の人と、時給何十万というような超特別待遇な人たちに二極化している。当社も月に2時間の取締役会に来てもらっている社外取締役の報酬は月何十万、つまり時給何十万だ。そういう人もいる。

しかし、それはほんの一握りの人であり、こなすため、遂行するための仕事はジョブ型で悪いことばかりではなく、良いことも多くある。例えば、地方にいて、介護しながら自分の獲得した知識をコマ売りできるというのは、すごく良いこと。だが、そんな人たちだけで社会構成しても何も生まれない。やはり生み出す人たちもある一定数、少なくない規模でないといけない。

○ 伝統的教育の前提になっていた、知識がない子供・若者に対して、知識を持った大人、あるいは専門的教育をする大人たちが教壇に立って、1対エヌで教えるというフレームワークはもう壊れる。学部レベルの知識であれば、極端な話、YouTubeで十分だ。やはり学校で集まって学ぶときに、重要なのは知識獲得の補助とか、あるいは知識がなぜ必要なのかというような意味を伝えること、あるいは知識があるだけでは駄目で、協力し合って何かを成し遂げていく、生み出していくという社会性について気付かせる機会を提供すること。だから結構本質的なところに入っていくといけないといけない。もちろん専門分野の知識を教えるのだが、その教える過程の中で、そういう機会をもっと入れていかないといけない。

- 産業教育を受けた人たちは、是非、生み出す側に行ってもらいたいということならば、やはり一緒に何か作るころだ。作ったときに喜んでもらえる喜びとか、そういうところにも踏み込まないと、知識だけ持たせるというのではいけないということを、この答申を見ながらもっと議論できたらいい。

会 長：

- かなり本質についての意見であるが、今回のこの答申で項目を新たに立てるのは難しいかと思うので、検討課題ということで今後に託したい。

委 員：

- 答申〔への反映〕はいいので。

会 長：

- 産業界の方がそういうことに早く動いていて、環境改善されているということだと思うが、大学も含めて教育改革は遅れている部分があるので、今の指摘は、教育界にいる者にとっては耳が痛い、しなければいけないと感じたと思う。

副 会 長：

- 同じく教職員の目指す姿のところについて、10ページの下部に「今後特に求められる教職員の資質・能力」という項目があるが、専門高校・専門学科の教職員に求められるところを何かもう少し踏み出して記載できないか。

パブリックコメントの7番で「教職員が産業界とのつながりを率先して強めるような行動をすべき」という意見があった。専門委員会の議事録でも、この視点を重要視されているような意見があったかと思う。

答申の10ページを確認してみると、一番下の辺りに「専門高校、専門学校の教職員においては」という記載が少しある。この項目は意見を受けて見直しをしたことにもなっているようだが、具体的には「教育課程の編成等を行うため」というような受け身ではなく、やはり専門高校・専門学科の教職員には、産業界の色々な動向に対応する姿勢、コンピテンシーのようなものがあってもいいかと思う。他の高校の教職員とは違った姿勢を持つべきだ、そういうものが求められているというようなことを、もう少し踏み込んで記載できないだろうか。そこまで書いては求め過ぎなのか、御意見を聞いてみたい。

委 員：

- 確かに、専門高校・専門学科の教員の姿勢というのは、より社会が具体に見えるという点から普通科の教員とは異なっていると思う。そうした姿勢は自力だけで生まれるものではなく、やはり地域や産業界の方との関わりというところで、生徒だけでなく教員も刺激を受けて身に付いてくるものというのが現状だと感じる。

ただ、教職員全員が気持ちを同じとし、一気に動くかという点、そこは個人の色々な価値観等があるので模索しているというような状況だ。例えば、学校外に関心があり、自分から知り合いを通じて、どんどん色々なネットワークをつくり、積極的に取組を進めている者もいれば、今与えられていることに精一杯で、発展的なところまで意識が向かない者もいるというのが現状である。なので、教職員の元気を引き出し、更に充実させていこうとなるために励みになる文言でないといけない。

専門高校の教職員の現状に足りないところがあるので、もっと充実させないとこれからの専門高校が成り立たないというような、そういう読み取りになると、意気消沈してしまいかねない、非常にデリケートな側面がある。

副 会 長：

- 皆さん全員に求めてもなかなか難しいところであると理解した。

会 長：

- 専門学科の教員は普通科の高校に異動することもあるのかお聞きしたい。つまり、資質を持っているから専門高校・専門学科にいるのか、専門高校・専門学科に行ったら資質を持てるように頑張ってもらえるのか。どちらか。

委 員：

- 教員には全て専門とする教科があり、工業高校には工業科の教員がいる。普通科に工業科の教員はいない。ただ、業務としては教科の指導もあるが、例えば部活動指導や学級経営等もあるので、生徒指導はもちろん、そういう分野については共通になる。

会 長：

- そうなると、専門学科ということで担当する教員にはこういう資質があるべきというまとめ方もできるかもしれないということだが、あまり言い過ぎて突き詰めすぎると、求めすぎという指摘に行ってしまうのかとも感じる。

委員：

- 児童生徒の前に立つ教員は、必要な力として様々なものが求められており、この答申にも記載されているとおりで。

今、各委員の御意見を聞きながら、資料4-2の概要版の方で、目指す姿の項目を見ていたら、生徒と教職員と学校を比べると、項目の数だけ見ても、教職員のところに7つも項目がある。どれも必要な力ではあるが、産業教育という視点で、絞ってもよいかと思う。

この7つが間違っただけを書いているわけではないが、当審議会で審議している点に特化しても良いのではないか。項目が増えると、何か教職員が「せねばならない」こと、やりたいというより「せねばならないこと」がたくさんある感じに受け取られかねない。

会長：

- 概要版で示されている7つの項目は、答申の本文では、10ページの四角囲み内の4つと、11ページの四角囲みの3つが並べて記載されているもの。11ページの3つが今回の答申で示す目指す姿を書いているものであり、概要版の方は後ろの3つを書くという考え方も確かにあるとお聞きして思った。

委員：

- 概要版は3つで良い。前の四つは当たり前のこと。

会長：

- この審議会で議論をしたものは後ろの三つということでよいと思うので、そのように修正したい。

- それでは、第3章の協議に移りたい。

ここは、(1)でデジタル化の進展への対応、(2)でグローバル化の進展への対応、(3)は持続可能社会の構築への対応と、現在対応していかなければいけないことについて書かれてあり、(4)は少し意味合いが違う部分もあるが、並列として個人と社会全体のウェルビーイングの実現への対応ということでもまとめる形にしている。それぞれのまとめである四角囲みについて、前3つについては、「何々の学習」という形で書いているが、最後のところは「何々のこと」という形で表現を変えている。こうした点も含め、いかがか。

委員：

- 第1章の現状を踏まえての方向性について、要点が網羅をされていると思う。デジタル化、グローバル化、SDGs^{*}と、方向性として盛り込むべきものが盛り込まれている。

委員：

- グローバル化というのが2番目にあるが、ここは今までのグローバル化とは意味合いが違ってきているということを示し切れていない気がする。ここは、しっかり議論したように思っていたが、今日こうやって改めて確認すると、この記載では、今までのグローバル化とあまり変わらない。グローバル化は、もっと大きく変わっている。

委員：

- それ、そのとおりだ。見逃していた。これでは事実ではない。うそが書かれてある。人、モノ、資本、情報等が国境を越えて移動するグローバル化は大きく後退している。

これは、答申全体のクオリティ、信認とかクレディビリティ^{*}を下げることになるので、ちょっと修正がある。でも、別に大した話ではない。ちゃちゃっという直しで。

委員：

- 専門委員会でも確認したはずだが抜けている。こうじゃないという話は何回もしたのに、このままの記載では、ちょっと現状把握ができていないと言われてしまう。

委員：

- ここは、進んでいたグローバル化が一転して、その前提が崩れるような状況になっていて難しい状況だということを書けばいい。

「グローバル化の混乱」とか、「不透明なグローバル化」といった記載が良い。

委員：

- 第1章の現状のところ、先が見えない時代だと言っているもので、そこをリンクするようにグローバル化を捉え、そこに値する人材とか、学びが必要というようなことで十分かと思う。

会長：

- 正にグローバル化していたときの状況がここに書いてあるが、混乱している現状をきちんと認識できていないように見えてしまうという指摘があった。

委員：

- 根本的にグローバル化には対応しなければならないが、それだけじゃないということが一言書いてあればよい。国際社会への対応ということはやっていかないといけない。平和な国際社会だけではなく、自国優先みたいなところがあって、そこも抑えた上で、いわゆる多文化共生というか、ニュアンス的にはそんなことを書ければよいと思う。
- 自国の外を見る前に自分のこと知るということも含め、しっかりと勉強していくこと。かなり最初の段階から提案させていただいてきたことだが、やはり地域の、広島歴史とか文化とか、そういうものをしっかりと学ぶということ。この後の第4章の方策のところに出てくるが、そことリンクしているということが伝わればよい。

会長：

- それでは、第3章については、(2) グローバル化の進展への対応のところ、更に踏み込んだ現状把握をしっかりと書き、次につながるような文章になるよう修正を入れるということで検討したい。その他の項目は、これで最終にする。
- 続いて、最後の第4章「目指す姿の実現に向けた産業教育に関する方策」について、これまで出てきた目指す姿、方向性を踏まえて、どういう方策を取っていくのが良いのかについての意見を取りまとめている。御意見があればお願いしたい。

委員：

- 教職員の知識、指導力の向上についての御意見が色々出ているところであるが、教職員のインターンシップのような場をつくれたらいいと思う。生徒のインターンシップの実施については、(1) 教育課程・編成の視点2に記載があるが、教職員の先生方にもインターンシップ的なものを行い、必ずしも先端技術を学ぶのではなく、今の現実の現場、企業等を体験していただくことで、感じ取れるところがあるのではないかと。

会長：

- 生徒のインターンシップについては記載があるが、15ページの(2) 教職員の資質・能力の向上のところ、インターンシップみたいな言葉があってもよいという御提案かと思う。教職員の項目には、視点3に「産業現場訪問」、「懇談会」の実施といった記載がある。しかし、訪問はインターンシップではないので、今、委員が言われたことも一つの方向ではあると思う。
- 以前の審議会で委員から、インターンシップについてであったか覚えていないが、企業側、産業界側から見て少し厳しめの指摘、何かぼんと来てもらうだけでは難しい、しっかりと目的などを考えて計画してほしいという御趣旨の意見があったかと思う。この教職員の項目にインターンシップのような言葉を入れるかどうかについて、補足や意見があればお願いする。

委員：

- 指摘があったように、あれこれ入れたら教職員も大変であり、我々も何のためにインターンシップするのかという目的、なぜこの活動をするのかが分からないとお互いにとって不幸なことになっていくと思う。教育委員会として、「教育環境の整備」の項目に挙がっているコーディネーターをうまく配置したり、産業と学校をうまく結びつけていくための産業教育支援協議会を設けたりするなど、枠組みを使っていくのがよいと思う。

会長：

- (2) 教職員の資質・能力の向上の視点2に記載がある産業教育支援協議会のようなものを設置することによって、教職員一人一人がインターンシップという形で動くというよりも、枠組み、制度としてしっかりと支援できるのではないかと。

委員：

- この産業教育支援協議会というのは、一体どういうことをやる会なのか。

事務局：

- 具体的な組織については、まだ検討段階ではある。ただ、例えば産業教育振興会のような広島県で産業教育を支えていただく企業と学校会員が一緒になって組織しているものがあり、そういう組織や既存の団体等も連携しながら、こういった形で産業教育を進めていくかという在り方を協議する会として検討していきたいと考えている。

委員：

- 正直な話、企業同士で産業界的なつながりをつくっているのは、大体古いところばかりだ。そんなところと組んだら時代遅れの石頭の連中と会うことになってしまい、学ぶことなんかゼロで、教員も生徒も駄目になる。

「産業何々会」という寄り合いがあって、一緒に何かやっていくというのは古い時代のフォーマットだ。特に広島県は古いものづくりで、石頭になっている人も多い。インターンなんて暇な会社しか受けない。当社も教員のインターンの受入を打診されても、忙しいから絶対断る。

そんな、産業界と何かの会を組んだから連携ができているというのは嘘で、絶対やめるべき。こんな会は設置もしなくてもいい。余計な仕事になるので、一意見としては大反対。

委員：

- 日頃、中小企業の経営者の方と対話をする、少子化や人口減少などで人手不足だということに危機感を非常に持っている。こうした社会課題が経営課題だという認識を持っている意識の高い経営者はいる。

それで、会社の魅力や会社のやっている価値創造の取組などを、地域・地元の学校などにも知ってもらいたいという思いを持っている経営者もいる。ただ実際、日頃つながりがないところとつながるために、どうしていいのかわからない、難しいというような話も聞く。

そういう意味で、この協議会がどういう形なのかにもよるが、コーディネーターを配置して教職員の負担軽減を図るということもできると思うので、コーディネーターが産業界と学校等をしっかりつないでいけると良いと私は思う。

委員：

- コーディネーターというのも、こういうものでよく出てくるが、一体何をコーディネートするのか。もっともらしい言葉で、コーディネートすることをミッションとして、退職した人が民間から来てやったら、しょうもない余計な時間を費やす機会ばかり作るということにもなりかねない。

ここに重きが置かれてはいないと思うが、こういう、ちらちらと出てくる古いスタイルの考えによるものが書かれてあることが怖い。

事務局：

- コーディネーターの在り方については、皆様の意見も踏まえて検討してまいりたい。

会長：

- 例えば、専門学科のある高校の横串みたいな話は出ているが、この協議会は、そういうつなぎ役になりうるもので、支援もするという事なら、こういう形を設けるのもいいのではないか。記載があることによって何か動きが出るなら、全くないよりはいい。ただ、無駄な動きにならないように。

委員：

- 産業界とつなげたいなら、オンラインを活用して全国でインタビューしてつなげるとかであれば、そのコーディネーションは良いと思う。しかし、単に広島の企業で、世を憂っているだけの経営者とつなげるなら反対。意味がない。

教育長：

- もう既にやっている取組としては、例えば、福山のイケてる会社に教育委員会の指導主事あるいは課長らが訪問し、ゲリラ的につないでいくというもの。

コーディネーターや協議会の設置と記載はしているが、大きな何かメインとメインで組むというのではなく、やはり人と人とのつながりでできているものなので、ゲリラ的につなげるところはつなげていけるようにする。それが教育委員会としてやっていくべきことかと思っている。

委員：

- ためになるところとだったら、どんどんやってほしい。

広島県の総括団体だからそこと話すとかいう程度なら、やらないほうがいい。

会長：

- どれも色々な取り方がある中で、悪い方向で捉えてしまうと、みんな悪いことになってしまうのだと思う。しっかりと意識を持って進めていくことが重要。

委員：

- これに関しては、レベルが色々あるとは思う。

例えば、広島市の青年会議所が小学生向けのカーボンニュートラルゲームというカードゲームを作った。これ、実は最初に私のところに相談があり、自分たちでカーボンニュートラルについて何か伝えたいということで、色々話す中で結局カードゲームを作ろうとなった。それで何社かが協賛し、実際に小学校まで授業しに行った。こういう活動をどれぐらい、学校や教育委員会が知っているのか、つながっているのか。

活発的に何か良い取組をやるうとしている人たちがぼつんぼつんというわけで、それらもうまくピックアップして学びにつなげるようなコーディネートをしてくれる人、情報を持ってきてつないでくれる人がいたら、私達〔企業側〕も助かる。

委員：

- そういうコーディネーションがいい。

委員：

- 今の点は、皆さんの意見が自分の視点とは少し違った。地域の活性化というところに目を向けて、生徒や教職員にどんな場が増えるかというふうに自分は思っていたが、そこだけでは新しいものは生み出せない視点、部分があるのではないかというようなやり取りのように思う。

- 義務教育からの視点でいうと、身近な職業、産業としては、例えば農家や水産業者などがある。そういう現場で生徒が経験したり、教職員も地域が今どういう状況なのかということを受け止めたりする機会が大事だと思いながら、取組を進めている。

- (4) 専門教育の魅力等の発信の項目については、内容についての修正ということではないが、中学校の立場からすると、やはり生徒にとって専門高校は、どうしても点数の輪切りの中での選択肢となる場合が正直ある。専門教育が社会の発展に大きくつながっているということ、専門高校が意義、意味のある取組、学習をしているということを十分には理解しないまま、進学している生徒もいる。

高等学校の専門学科の取組については、やはり中学校又は小学校に対して様々な方法で積極的な発信をお願いしたい。

- もう一つ、専門高校等が「高校生スペシャリストの祭典」の開催を予定しており、そのポスターをスペシャリスト祭典実行委員長の高校3年生の生徒が、市内の小学校、中学校に持ってきて、中学生や、中学校の先生に見に来てほしいと呼び掛けていた。今までは開催案内が送られてきて、それだけだと私たちもなかなか行かないが、生徒がそうやって動いているということで、是非、自分も行きたいと思うので、すばらしい行動だと思う。

そういう草の根のような、志を持って動いていくことで人の行動は変わっていくところがあると感じたので、この場で紹介させていただく。

- 働くということについて、生徒たちは身近なものがなかなか見えなくなっている。中学校では、キャリア・スタート・ウィークで地元の職場を体験しようということで2年生が取り組んでいる。目的がはっきりしない生徒がいるという指摘もあったが、長く続けていると、もう自分たちも行く学年なのだと気づき、そこで何らか目標を持っていこうとする生徒が増えてきていると感じる。

例えば、地元の自動車整備工場の方などは、来てくれる生徒がいないと嘆いている。油でまみれることに抵抗があるのだろうかという思いがという悩みを打ち明けられる。

企業の方も、先が見えない状況の中で工夫をしているというような話のやり取りになってくる。つまり、それぞれが今までどおりの現状維持で満足はしていない。小さな企業の方も考えながらされているところを子供たちには伝えていきたいし、子供たちもそれを見て学んでいる様子もあるので、続けていくことも大事だと思っている。

会長：

- 貴重な御意見だ。高校も既に色々なことをやっておられると思うが、何か御意見はあるか。

委員：

- スペシャリストの祭典については、長年、毎年担当校を定め、各専門学科が集まった実行委員会を中心に進めている。基本、子供たちが主となりながら、色々な困難を克服して取り組んでいる。今年は呉商業高等学校が中心になって進めているが、呉までのアクセス面で悩まれていたりする。やらされではなく、自分たちがどうしたいのかということ大切に、高校生自身が動くことで人を引きつけるという面もあることから、御紹介いただいたような広報を積極的に進めていければと思う。

- それとは別に、まず(1)の視点5の最後の丸「最先端のデジタル機器とその原理を学ぶことのできる手動で操作する機器の両者の扱いを学ぶ実習の実施」は、かなり具体的に書いてあり、これはしっかり残したい。

現在、デジタル機器については実際、活用するための教員研修もやっている。ただ、色々な企業が就職・求人活動で来られると、基本となる機器をきちんと操作できるか、知識があるかとか、それがあから全国ものづくり大会等に出場して応用が利くのだと言われる。だから、両方必ず要るということを日々実感する。

- 次に(2)では、第2段落の「教職員が時代の変化に対応して求められる資質・能力を身につけるためには」以降の3行のところで、教員自体のマインドセットを意識した学校にしていくことがすごく大事だと感じる。

実は、本校ではこれまで、とにかくモノを製作する際、どのように精度を上げるかということ課題研究と呼んでやってきた。しかし、やはり課題研究というのは、そもそも生徒が何を課題と捉え、解決のための仮説を立て、PDCAを回しながら考えるべきものであると考える。今回、本腰を入れて全学科でその考えのもと取り組み、先日、中間発表を終えた。そうすると、工業科の生徒が苦手と言われがちな表現力や、計画性を持って論理的に話すといったことにまだ課題は見られるものの、成長が見られた。

それに加えて、本校には実習教員もたくさんいて、技術伝承になると70歳を超える先生もおられる。そういう70歳を超えた実習教員が、自分らの時代は課題研究という、何かを作るためにどういう工夫をするかしかやっていなかったが、テーマ設定とか計画を立てるために時間を使う中で、生徒がどんどん自分の言葉で、自分で工夫をして、どうすれば良いのか考えながら展開し始めるので、自分自身も勉強になると言ってくれた。ベテランの先生も生徒と一緒に学んでいると感じ嬉しかった。

会 長：

- 一つのことをやるときに、教えるのではなく一緒に学んでいくという言葉が入ると、生徒も教員も一緒に学んでいくということにつながるのではないかと思いながら、今のお話を聞いた。

最後、全体的に御意見はあるか。

副 会 長：

- 教育支援協議会とコーディネーターについては、協議会にどういうメンバーが入り、どういう機能をもたせるか、ここが大事だと思う。配置するコーディネーターと相乗効果を持ちながら、連携強化していくということが大事だと理解している。

委 員：

- 産業教育支援協議会については、個人的にはあってもいいと思う。

小さい中小企業系の団体組織だと大きい経済同友会とか、色々な規模の組織があると思うが、中には何も変わらずに現状で満足している発展のない企業もあるだろうし、すごく新しいことを目指している企業もあるかと思う。だから、関わる人、関わる企業によっては大きく変わってくると思うので、その選定、コーディネーターになる方の目利き、色々な方との関わりが今後必要になってくるのだと思う。

関わる組織、関わる人で大きく左右される。発展性が全然ない繋がりになることだけは避けていくような形での選定が必要だと思う。

委 員：

- 最後なので率直に話すが、やはり目的が、例えばマツダの工員になることでは絶対に駄目。それは手段。何のためにマツダの工員になるのか。江田島でカキ打ちの仕事をしたいなら、何のために自分はそれがしたいのか。

結局、仕事をして生きていくということは、誰かの役に立つ、何かの課題解決になっていかないといけない。自分はこういう社会課題に対して、こういうことがしたいから、ここで働きたい、こういう仕事に就きたいと言えないといけない。その結果がマツダの工場で働くということになるかもしれない。そのことを生徒に伝えられるような学びにするべき。

例えば、江田島で自動車整備工場に就職希望する若手がなかなかいないという話も、江田島で自動車の整備の仕事をする、こんなに地域のためになる、公共交通機関が十分にはないところで、高齢者も安心できるモビリティを成り立たせたいというような目的があれば、そこで働きたいとなり得る。そういう学びに全体的に持っていく。

コンテストをするにしても、ファシリテートをするにしても、そういう視点を持った授業をやらない限り、取りあえずマツダに5人入れたいみたいな前提で先生が就職指導したら、生徒はたまったものではない。自分はどこでどんな仕事をしたかということ自身で選んで、それが結果として広島企業であれば、ありがたいということ。

会 長：

- 最後に、概要版については、答申の本文に書かれていることを抜き出してまとめてられている。目指す姿については、先ほどの提案どおり、教員の姿の上4つは削除し、下三つを残す形にすることで決定したところ。裏面は、第4章の方策で上がっている視点及びその内容についてまとめたものを抜き出して書いてある。

他に特段の指摘がなければ、このとおりまとめることとしてよろしいか。

(異 議 な し)

会 長 :

- では、そのようにしたい。それでは、協議は、この辺で終わりにさせていただく。
ここまでの協議で、方向性については、12ページの第3章(2)グローバル化の項目について、現状をしっかりと捉えた内容にするという宿題をいただいた。これについては、事務局で修正案を作成いただき、各委員に確認いただくという形を取りたい。
今後、委員の皆様個別に確認いただいた上で、答申の最終版としたい。個別確認の際には、お気づきの点は御指摘いただければと思うが、時間の限りもあるため、最終的な決定は会長の私に一任いただき、完成という形をとらせていただきたい。
- 答申が出来上がるということは一つの形ではあるが、この後、方策に掲げていることなどについて、実際に物事が動いていかないと、答申を出した意味がない。その点は、これから事務局に尽力いただきたい。また、産業教育を活発に盛り上げていくために、我々も協力させていただきたいと思う。

以上

【用語解説】

	用語	解説
え	SDGs (エスディージーズ)	Sustainable Development Goalsの略。 「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標(2015年9月に国際サミットで採択)。17のゴール、169のターゲットから構成。
く	クレディビリティ (credibility)	真実性。信頼性。信じられること。
ふ	VUCA (ブーカ)	不安定(Volatility)、不確実(Uncertainty)、複雑(Complexity)、曖昧(Ambiguity)の頭文字を並べたもの。 将来の予測が困難な状況を示す造語。